

Na margem do rio Piedra eu sentei e chorei

# ピエドラ川のほとりで

## 私は泣いた

パウロ・コエーリョ [著]  
山川絃矢・亜希子 [訳]

ちゅう  
地湧社



Na margem do rio Piedra

usando choroí

学院図書館  
書章

ピエドラ  
川のほとりて

私は泣いた

パウロ・コエーリョ — 著  
山川紘矢・亜希子 — 訳

ちゅう  
地湧社

## ピエドラ川のほとりで私は泣いた

---

1997年 3月20日 初版発行

著 者 パウロ・コエーリョ

訳 者 山川紘矢・亜希子 ©1997 Koya, Akiko Yamakawa

発行者 増 田 正 雄

発行所 株式会社 地<sup>ち</sup>湧<sup>ゆう</sup> 社

東京都千代田区神田東松下町12-1 (〒101)

電話番号・03-3258-1251 郵便振替・00120-5-36341

印 刷 (株) シナノ

製 本 小高製本

---

万一乱丁または落丁の場合は、お手数ですが小社までお送り下さい。  
送料小社負担にて、お取り替えいたします。

ISBN4-88503-131-1 C0098

I・CとS・Bへ。その愛に満ちた語らいによつて、私は神の女性の顔を見ることができました。

私の初めからの仲間、モニカ・アンテューネスへ。その愛と情熱は、世界中に炎を広げてくれました。

パウロ・ロツコへ。二人で共に戦った喜びと、二人の間の戦いの尊厳に乾杯します。

そして、マシュー・ロアへ。易経の中の「忍耐は美德である」という言葉を忘れずにいてくれたことに感謝します。

*Na margem do rio Piedra eu sentei e chorei,*  
the Portuguese original edition  
published in Brazil by Editora Rocco Ltd. (Rio de Janeiro)  
Copyright © 1994 by Paulo Coelho  
This edition published by arrangements with  
Sant Jordi Asociados, Barcelona, Spain.  
All rights reserved.

## はしがき

スペイン人の宣教師がとある島を訪れた時、三人のアステカの僧に出会った。

「あなた方はどのように祈りますか？」とその宣教師が聞いた。

「私たちは一つしか、お祈りの方法を知りません」とアステカの僧が答えた。「神様、あなたは三人、私たちも三人。どうぞ私たちに憐れみを、と祈ります」

「美しいお祈りですね。しかしそれでは神様は願いを聞いてはくれません。もっと良いお祈りを教えてあげましょう」そう言って、スペイン人の神父は、三人にカトリックのお祈りを教えた。そして、布教の旅を続けた。何年か後、彼がスペインに帰国する途中、船が再びその島に立ち寄った。宣教師はデツキから例の三人の僧を海岸に見つけて、彼らに向かって手を振った。

すると、三人の男は水の上を歩き始め、彼の方に近づいて来た。

「神父様、神父様！」船に近づきながら、その内の一人が叫んだ。「神様が願いを聞き届

けてくれるというあのお祈りを、もう一度教えて下さい。私たちは忘れてしまいました」「それでいいのです」と宣教師は奇蹟を目撃しながら言った。そしてあわてて、神様はどんな言葉も話されるということをはわからなかった自分をお許し下さいと、神にあやまったのだった。

この話は、この本の内容をそのまま説明しています。私たちは、自分が奇蹟の真つ只中に生きていることに、ほとんど気がついていません。奇蹟は私たちの日々の生活の中に起り、神の合図は私たちに道を指し示し、天使たちは私たちにその声を聞いてもらいたくうずうずしています。しかし、私たちはこうしたことに、少しも注意を払いません。なぜなら、神を見つけたかったら、ある決った形式や規則に従わなくてはならないと、私たちは教え込まれているからです。神がやって来るのを私たちが許しさえすれば、神はどこにでもおられるのだということに、私たちは気がついていないのです。

伝統的な宗教的習慣は大切です。礼拝やお祈りを通して、他の人々と宗教的な体験を分かち合うことができるからです。しかし、霊的な体験とは、何よりも愛を実際に体験することだということを忘れてはなりません。そして、愛には規則や決りなどありません。ある人々は自分の感情を抑え、どのようにに振舞えばうまくゆくか、戦略を練る努力をします。またある者は、人間関係に関する本を読み漁って、専門家の意見を学ぼうとします。でも、

こうしたことは、みんな愚かなことです。愛は心が決めることなのです。そして心が決めることだけが、本当に意味のあることなのです。

私たちはみな、次のようなことを体験しています。涙ながらに、「私は報われない愛に苦しんでいる」と嘆いたことがありますか？ 受け取るよりもたくさんのものを与えていると感じて、私たちは苦しみます。自分の愛を相手に気づいてもらえないために、私たちは苦しみます。相手に自分のルールを押しつけることができなくて、私たちは苦しみます。

しかし、本当は、苦しむ理由は何もないのです。なぜなら、すべての愛の中には、成長の種子が秘められているからです。愛すれば愛するほど、私たちは神秘的な体験に近づきます。真に悟った人、愛によって魂を照らされた人だけが、その時代の禁制や先入観を乗り越えることができます。彼らは、歌い、笑い、大声で祈ることができます。そして、聖パウロが「聖なる狂気」と呼んだものを体験し、踊った人たちなのです。彼らは喜びにあふれています。なぜなら、愛を与える者は世界を征服し、失うことを恐れないからです。本当の愛とは、完全に降服し、ゆだねることなのです。

この本は、すべてをゆだねることの大切さについて書かれています。ピラールと彼女の恋人は架空の人物ですが、愛を探し求める者たちを悩ませる多くの葛藤を、二人は演じています。遅かれ早かれ、私たちは、いつかは自分の中の恐れを克服しなければなりません。



なぜなら、神への道は毎日の愛の体験を通してのみ、進んでゆくことができるからです。

トーマス・マートンはかつて、霊的な人生とは、本質的には愛することであると言いました。良いことをするためや、誰かを助けたり守ったりするために、私たちは愛するものではありません。もしそうならば、私たちは、相手を単なる対象として認識し、自分自身を賢くて寛大な人間だと思い込んでいるのです。これは愛ではありません。愛するということは、相手と一つになり、相手の中に神のきらめきを発見することなのです。

ピエドラ川のほとりで涙するピラールの悲しみが、私たちを真実の愛へと導くことを願っています。

パウロ・コエーリョ

ピエドラ川のほとりで私は泣いた

しかし、知恵の正しさは  
彼女のすべての子らが  
証明する。

ルカ伝 七・三五

ピエドラ川のほとりにすわって、私は泣いた。この川の水の中に落ちたものは、木の葉も虫も、鳥の羽さえ、岩に姿を変えて、川底に沈むと言い伝えられている。心を胸の中から取り出して、流れの中に投げ込めるものならば、恋もこの苦しみも終って、私はすべてを忘れることができるだろうに。

ピエドラ川のほとりにすわって、私は泣いた。冬の空気が私のほおの涙を冷し、その冷たい涙は、私の前の流れの中へはらはらと落ちていった。この川はどこかでもう一つの川と合流し、さらにまた、別の川と合流して、私の心からも視野からもずっと離れたところで、海と一つになるのだ。

私の涙もまた、ずっと遠くまで流れてゆきますように。そして私が、かつて彼を思っ泣いたことを、私の愛が思い出しませんように。私の涙が川の水と共に海に流れ込み、このピエドラ川も、ピエドラ修道院も、ピレネーの教会も、あたりをおおう霧のことも、そして二人が共に歩いた道も忘れてしまうことができますように。

私の夢だったあの道も、あの山も野も、もう忘れてしまいたい。あの夢は決して実現することはないのだから。

私はあの魔法の瞬間を覚えている。「はい」か「いいえ」が人の一生を変えてしまうあの瞬間のことを。今ではそれもずっと遠い昔のことのような気がする。私が自分の愛をもう一度発見し、そして再び彼を失ってしまったのが、つい先週のことであると、とても

信じられないほどだ。

私はこの物語をピエドラ川のほとりで書いている。私の手は凍え、足は感覚を失い、私は今すぐにでも、ペンを置いてしまいたいと思っている。

「生きる道を探して下さい。思い出に浸るのは老人のすることだから」と彼は言った。

おそらく、愛は時の経過よりも早く、私たちを老いさせるのかもしれない。それとも、愛は年とった人々を若返らせることもあるのだろうか？ でも、あの愛の時を思い出さないでいることなど、今の私にどうしてできようか？ だからこそ、私はこれを書いているのだ。悲しみをあこがれに変え、孤独を思い出に変えるために。この物語を自分自身に語り終った時、それを全部、ピエドラ川に投げ捨てることができますように。私を助けてくれたあの女性が、そうするようにと私に言ったのだ。その時に初めて、聖人の言葉にもあるように、「炎が書いた言葉を、水が消してくれるだろう」と。

すべての愛の物語は、その本質はみな同じなのだ。

私たちは子ども時代を一緒に過した。その後、彼は去っていった。小さな町を出てゆく多くの若者の一人だった。「自分は世界を学ぶのだ。自分の夢はソリアの平野のあなたにある」と彼は言った。

それからずっと長い間、彼からはほとんど便りがなかった。その後、彼は時々私に手紙をくれるようになったが、一度として、私たちが一緒に過した思い出の道や平野には帰ってこなかった。

私は学校を卒業すると、サラゴースに移り、そこで初めて、彼の言ったことが正しかったということを知った。ソリアは小さな町にすぎず、ソリア出身で唯一有名な詩人がかつて語ったように、「道は旅人のために作られていた」。私は大学に入学し、ボーイフレンドを見つけた。そして奨学金を得るために勉強を始めた（私は授業料を払うために売子をして働いた）。しかし、奨学金はもらえず、そのあとすぐに、ボーイフレンドとも別れてしまった。

そして、あの子どもの頃の友達から、ひんぱんに手紙が届くようになった。その手紙にはいろいろな国の切手が貼ってあって、私はそれがともうらやましかった。彼は何もかも知っているように見えた。今や羽がはえて、世界中を飛びまわっているかのようだった。一方私は、何とか根を張ろうともがいているだけだった。

フランスの同じ場所から出された何通かの手紙の中で、彼は神について語っていた。そ

の一つには、修道院に入つて一生を祈りに捧げたいと書いてあつた。私は、その返事として、彼に少し待つてみた方がいい、そんなに重大なことを決心する前に、もっと自由を体験すべきだと思う、と書いたのだった。

しかし、もう一度自分が書いた手紙を読み返してから、私はそれを破ってしまった。自由とか、決心などと偉そうな口をきく資格が自分にあるのだろうか？ 彼と比べれば、私はそうしたことについて、何ほどのことも知らなかった。

ある日、私は彼が人々に講演をし始めたことを知つた。これには私は驚いてしまった。人に何かを教えるには、彼はまだ若すぎると思つたのだ。すると彼は、次にマドリードで小さな集会有り、そこで話すことになつたと、私に知らせてきた。そして、私にそこへ来て欲しいと書いてあつた。

そこで私は、サラゴサからマドリードまで、片道四時間かけて出掛けていった。彼にもう一度会つてみたかつた。彼の声も聞いてみたかつた。カフェと一緒にすわつて、私たちが幼かつた頃のこと、世界はあまりにも広すぎて、世界のことを本当に知ることなど、誰にもできないと二人とも思つていた頃のことを、互いに語り合つてみたかつた。

一九九三年十二月四日 土曜日

集会が行われる場所は、私が想像していたよりも、ずっと立派なところだった。それに、思っていたよりもずっとたくさんの人々が集っていた。一体、これは何なのだろうか？

彼は有名であるに違いない、と私は思った。手紙には、そんなことは少しも書いてはこなかった。私は人々に近づいて、なぜここにいるのか聞いてみたかったが、それだけの勇氣はなかった。

部屋に入ってきた彼を見て、私はもつとびくりした。それは私が知っていた子どもの頃の彼とは、まったくの別人だった。もちろん、あれから十二年もたっているのだから、変わっていて当たり前なのだ。その夜の彼の目はキラキラと輝き、とてもすてきだった。

「彼は私たちに、私たちのものだったものを返してくれるのよ」と私の左側にすわっている女性が言った。

聞いたこともないことだった。



「何を返してくれるのですか？」と私は聞き返した。

「私たちが盗まれたものよ。宗教よ」

「違いわ。彼は私たちに何かを返してくれるわけではないわ」と今度は私の右隣りにすわった若い女性が言った。「ずっと私たちのものだったものを返すことなどできませんの」

「あらそう。じゃあ、あなたは何をしにここに來たの？」いらいらした様子で最初の女性がたずねた。

「彼の話を知りたいからよ。彼らがどう考えているのか知りたいの。彼らはその昔、私たちを火あぶりにしたけれど、もう一度そうしたいと思っているのかもしれないわ」

「彼は一つの声にすぎないの」と最初の女性が言った。「彼は自分にできることをしているのよ」

若い女性は皮肉っぽく笑ってそっぽを向き、会話に終止符を打った。

「彼は修道士としては、勇氣のある立場をとっているのよ」と、もう一人の女性は言つて、支持を求めるかのように私を見た。

私は二人が何を言っているのか、全然わからなかったので、何も言わなかった。その女性はやつとあきらめた。右側の若い女性は、私が彼女の味方であるかのように、私に片目をつぶってみせた。